

支えられて50年。可憐な舞に感謝の気持ちをこめて――

90歳を過ぎても、敬老会などで日本舞踊を舞い続ける平口清太郎さん。18歳で女形の衣装に袖を通してから、50年以上かけて名取りの夢を叶えました。鹿島踊りでも現役で笛を吹く平口さんは、地域の枠を越えた人気者です。

【島田初の盆踊り】

「当時は、的にされるから、たいまつを消すようによく怒られましたよ。それでも、明かりを消して踊り続けたものです」と笑顔で振り返る平口さん。これは、女形を初めて踊ったときのエピソードであり、島田で初となる盆踊りでの出来事です。

戦時中は地域に重苦しい雰



囲気が漂い、未来に夢を抱くべき若者たちが、楽しむことを知らないままビクビク過ごしていたそうです。そんな状況を見かねた師匠が、下島

（現在の旭町付近）に住む平口さんら若者に呼び掛け、盆踊りの開催が実現しました。

「盆踊りのおかげで、みんな元気を取り戻しました。そのあと、師匠から本格的に日

の後には時代の流れを受けて、鉄工場に勤めを変えました。その間も、仕事の傍ら日本舞踊を熱心に習っていた平口さんは、社員旅行などの宴席で女形の舞を披露し、他の社員



日本舞踊を舞う90歳の人気者
平口清太郎さん（向島町）

本舞踊を勧められたんです」

【楽しんでもらうことの喜び】

平口さんは、父が大工をしていたこともあり、始めは木工所で勤め出しましたが、そ

を楽しませていたそうです。

「稽古を重ねるだけでは、舞を続けてこられたかわかりません。人前で舞う環境があり、みんなが楽しんでくれたことが、いつしか私自身の喜

びになっていました。だからこそ、辛い稽古もこなしてこられたのです」と語る平口さんは、「髪結い（美容師）は私のわがままに苦勞しているでしょう。私の子どもたちも積極的に協力してくれています。妻も生前、よくついてきてくれました」と、支えてくれた人々への感謝の言葉を口にします。

【恩返しへの気持ち】

平口さんから女形の所作（しぐさ）を習ったことのある人は「買ひ物をしていたら、女性らしくなった」と近所の人にほめられました」と、喜んでくれたそうです。「もちろん私もうれしかったです。でも、妻が亡くなってからは、人に教えることをやめました。教えるより、妻が好きな日本舞踊を元気に舞っていたいから」と話す平口さんは、今は、支えてくれた皆さんへの恩返しへの気持ちで舞っていると言います。

時間を忘れて楽しんでくれる多くのファンのために、平口さんは舞い続けます。



宮川町敬老会で女形を舞う平口さん



Shimadian File #49

